

## 小学校 図画工作科 部会

部会長 中津原小学校 校長 村上奈美代  
実践者 添田小学校 教諭 太田 美穂

### 1. 研究主題

「確かな学力をめざす図画工作科学習指導のあり方」  
～感性を働かせ、表現を楽しむ活動を通して～

### 2. 主題設定の理由

#### (1) 現代社会の要請から

現代社会は、豊かな物質と情報に満ち溢れ、国際化、情報化、少子・高齢化、価値観の多様化などめまぐるしく変化している。その変化の激しい社会の中で、たくましく生きていく子どもの育成が、学校には求められている。

新学習指導要領においても「生きる力」の育成が最重要視されており、豊かな人間性の育成が現代の子どもたちに強く望まれている。また、昨今、重要視されている心の教育は、道徳教育だけでなく全ての教育活動に求められている。図画工作科を通して育む豊かな情操は「豊かな心の育成」の上で、道徳教育と同じ土壌に立っていると考えられる。

これらのことから、これからの教育において、子どもたちの豊かな情操を養うことが、豊かな人間性を育成する上で大切になると考えられる。

造形活動において、自ら決めた色と形で自主的・主体的に構成していく行為は、自己の存在をかけがえのないものとして感じ、同時に他を尊重する心情にもつながっていくものである。その意味においても、生活や社会と主体的に関わる態度を育て、豊かな情操を養うことをねらいとする図画工作科の役割が今後さらに大切になると考えられる。

#### (2) 図画工作科の目標から

図画工作科のねらいは「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎を培い、豊かな情操を養う」ことにある。新学習指導要領改訂に伴い、「感性を働かせながら」や[共通事項]が新たに加えられた。感性とは、様々な対象や事象を心に感じ取るはたらきであり、その感性を自由に発揮することが、つくりだす喜びにつながるようになる。「感性を働かせながら」とは、児童の感じ方や思いを一層重視し、従来の「感覚」という言葉から一層踏み込んで、知性と一体となって働く感性的な判断までを視野に入れている。このことは感覚をベースにして、感性的な応答を洗練していくことが人の行動を深いところで律している豊かな情操につながれている。いわゆる感性が知性と一体化して、人間性や創造性の根幹をなすものとして重視されていることの表れであり、様々な題材を通して、子どもが自分の感性を十分に働かせて学習することに図画工作科の意味があると考えられる。

また、「          する活動を通して」という文言の挿入は、細分化された個々の技能獲得を問題にするのではなく、自分の表現への思いに沿って、造形活動を展開させていってほしいという願いが込められたものである。

さらに、[共通事項]が新設されている。これは、表現及び鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力を[共通事項]として示している。指導において、自分の

感覚や活動を通して形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえ、これを基に自分のイメージをもつことができるようにすることである。そのため、造形活動に人がどのようにかかわっていくのかについて示すことになっている。これは中学校の美術科、高等学校の美術、工芸さらには生涯学習につながっていく資質・能力を示している。自分の感覚で主体的な活動から形や色を感じ取っていくことや、形や色を軸にしてそれぞれの思いを全体的な感じや像として結んでいく能力を形成していくことである。

以上のことから、題材に対して感性を十分に働かせ、表現していく活動を学習活動に取り組みことは大変意義深いと考えられる。

### (3) 児童の実態から

本来、子どもたちは図工の時間が大好きである。それは、自分の表現の思いや願いから、自分らしい豊かな表現を楽しみたいと願っているからである。しかし、その思いや願いが形や色として表せず、自分の思いを表現できない子どもがいる。それは、子ども任せになって自由に表現させていたり、教師主導の作品主義で子どもの思いに寄り添った適切な支援がなされていなかったりした指導の仕方に課題があると考えられる。

図画工作科の学習は、子どもが描きたい、つくりたいと思う素材や材料に対して、五感を十分に働かせ、新たな発見や発想、自分の表現方法が生まれ、自分の納得のいく活動や作品ができあがることである。つまり、材料や対象と関わる中で体全体の感覚を働かせ形や色をとらえ自分なりにイメージをもって造形活動を行ったり、制作途中の作品や活動、完成した作品の鑑賞をしたりすることで、つくりだす喜びを味わうことにつながると考える。

## 3. 主題の意味

図画工作科における確かな学力とは

図画工作科における確かな学力とは、基礎・基本としての資質や能力を支え、その基盤となる知識や技能や見方・感じ方と考えられる。具体的には下記のようにとらえる。

色・形・素材などの特徴をつかみ、自分の表現に生かすことができる。

用具の特徴を生かした使い方ができる。

自分が表したいように、表現方法を選択できる。

描写力や構成力など

図画工作科における確かな学力は、つくり方や描き方を手順を追いながら機械的にたどっていけば身に付くものではない。子どもが具体的なものに働きかけ、自分の思いを材料に託し、表現する中で、自らが気づき身につけていくものである。つまり、子どもの表現や鑑賞の活動と一体となって働く力ととらえる。

そのためには、ある題材から「発想を広げる」「計画する」「表現する」「お互いのよさを見合う」といった活動を取り入れる必要がある。また、表現していく際、発想したものを自ら立てた計画（思考力）に従い、自分なりに工夫を加えながら（判断力）、自分の作品をつくりあげていくこと（表現力）が確かな学力へとつながると考える。その資質や能力を支えていくためには、教師側でも指導と支援の在り方を工夫することが重要である。このような学習を行っていくことで、他教科と同じように、図画工作科における確かな学力が向上していくと考える。

#### 4 研究の目標

図画工作科における確かな学力向上をめざすために、感性を働かせながら、表現を楽しむ学習活動の在り方を究明する。

#### 5 研究仮説

低学年の「表現」の学習において、次のような点に留意し、手だてを工夫すれば、児童が意欲的に表現し学力向上へとつながることができるであろう。

初めてクロッキーに挑戦するため、線の描き方の練習をさせる。

画用紙に中心線を入れ、左右のバランスを取りながらクロッキーをさせる。

描く手順を確認しながら、絵を描かせる。

#### 6 研究の計画(授業の計画)

(1) 単元 「ザリガニをかこう」

(2) 単元の目標及び指導計画

題材	ザリガニをかこう	総時数	3時間	9月
単元目標	ザリガニを実際に見て表すことを通し、つくりだす喜びを味わう。 (関心・意欲・態度) 表そうとしている形にふさわしい線を選択し工夫しながら絵を描く。 (発想・構想) ザリガニの表し方の手順を知り、線の描き方を選択しながら発想を広げ取り組む。 (創造的な技能) 友だちの作品を見て、感じたことを話したり友人の話を聞いたりするなどして、形や色、表し方の面白さを味わう。 (鑑賞の能力)			
単元	学習活動・内容		指導上の留意点	
	1 4Bの鉛筆でいろいろな線を描く。		・4Bの鉛筆に慣れるために、まっすぐな線・くるくるな線を描かせる。 ・芯の柔らかさに慣れさせる。	
	2 自分の手をじっくり観察しながら、特徴をつかみ描かせる。		・画用紙に折り目を付けることで中心線を作り、中指が中心に来るように描かせる。 ・どのような線で描けば、指の丸みや爪の形が描けるか考えさせながら描かせる。	
	3 実際にザリガニを見て絵を描くことを確認する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px; display: inline-block;">ザリガニを見て、絵を描こう</div>		・実際にザリガニを見ながら、特徴をとらえ、4Bの鉛筆を使用して描かせる。 ・中心をとらえさせ、ザリガニの体を描くことができる。	

## 7 指導の実際

本単元の指導にあたっては、まず学習に入る前に各自に4Bの鉛筆を使用させることを確認した。今までは2Bの鉛筆は使用したことがあるが、芯の柔らかい鉛筆で描くことが初めての2年生にとっては、画材との出会いも新鮮である。

線の描き方から始め、自分の手を描きながら特徴をとらえ、最後に動いている生き物をクロッキーしていくことへと徐々にチャレンジさせていくよう計画した。

### 【第1時】

#### 「うすい線・濃い線・細い線・太い線」

本単元の導入では、以下のような手だてをとった。

まず、4Bの鉛筆で線の試し書きをさせていった。普段HBやBを使用している児童にとって、芯の柔らかな鉛筆を使うことは力の入れ方が困難に感じたようだった。低学年の児童は絵を描く際、線を強く描いてしまうために、消しゴムで消したときに前の線が残ってしまう。そのため、画用紙にはできるだけ細く薄く線を描き始めるよう注意をし、練習を繰り返していった。低学年にとって、細く薄く描くことは困難なことであり、今回クロッキーを行うにあたり大切な準備運動のようなものとなった。

### 【第2時】

#### 「自分の手を描く」

線の練習をした後は、自分の手を描くことに挑戦した。絵を描く際、どうしても小さく描いてしまい大きく描けないという現状があった。今回は八つ切り画用紙の半分を使用した。その紙を半分に折り、中心に中指が来るように描くように指示した。その線が入ることで、大きさやバランスを考えて描き進めていくことができた。いつもであれば、画用紙の下の方に小さく描いている児童も、線を意識したことで手首や手のひらの大きさも考えて描こうとする姿が見えた。また、線の太さも意識したためか消しゴムを使う回数も減り、じっくりと黙って作品作りに集中する姿が見られた。さらに、描き進めるうちに、指の長さや関節、爪などの形についても特徴を捉えようとじっくりと見ながら仕上げていくことができた。クロッキーに初めて挑戦した2年生であったが、影を意識して描きはじめる児童もいて、作品の仕上がりを喜んでいった。短時間ではあるが、充実した1時間になった。

### 【第3時】(本時)

#### 「ザリガニを描こう」

(ザリガニとの出会い)

クロッキーをするにあたり、ザリガニを教室の中で飼育させ、日頃から目に触れていたことで児童達がクロッキーをしたいという意欲は高まっていた。生き物を触ったり、見たりする経験が少ないため、1人に一匹ずつ配ると興味津々で観察していた。その中で児童にザリガニの体の特徴をつかませていくようにした。

- ・小さいハサミがある。ハサミは2本ある。 ・色が赤い。
- ・ひげもあるよ ・足が8本もある
- ・目が思っていたより上に付いているな



ザリガニの体の特徴をとらえるために、透明の入れ物に入れたものを準備した。普段じっくり見ることができない足やハサミの様子を観察することができ、児童の興味も持続した。



ザリガニの体を上から観察している。ひげやしっぽ、目の位置などを確認している。時々ザリガニが動くことで、体に節があることに気がつき、それを絵の中に生かすことができた。この児童も、授業の中で意識が持続していた。



画用紙に折り目を付け、中心をとらえて描かせていった。最初は小さく描いていた児童も、中心を把握したことで、大きく描くことができた。観察をしながら描いているので、手足の位置がそれぞれ違っており、動きのある絵を描いていくことができた。



胴体を描いていく際、節を細かく見ているので、体を曲線で表している。最終的に、陰影を意識した絵に仕上がった。

細かいところまで観察をしていったので、背わたの線まで描き込んでいった。



鉛筆の濃淡を生かして、絵を描いている。体の節ごとに観察して描いていくことで、足の位置もひとつひとつ違っていった。動きのある絵に仕上がっていった。

## 8 成果と課題

### (成果)

この学習では、クロッキーを低学年で取り入れることを中心に進めてきた。芯が柔らかく、初めのうちは少し困難だろうと思っていたが、線の描き方の練習を取り入れたため、曲線や薄い線なども描けるようになっていった。低学年であっても、画材の使い方などを練習させることで絵を描くことは可能であった。

生き物を観察しながら絵を描くことは困難に思えたが、鉛筆の線を選んだり、濃淡を工夫しながら描き進めていったので、直線で表している児童はいなかった。

線の描き方の練習をして描き始めたため、自分で線の太さを選択する場が出てきた。この練習をした後だったので動きや陰影を意識し始めた児童も増えてきたと考えられる。

画用紙を半分に折らせることで、中心にあたる部分が分かるようにした。中心に沿って描けない、絵を小さく描いてしまう児童にとっては、意識して描けるので有効であった。

「どこから描いたらいいかわからない」という児童が多いという実態があったので、観察していく手順を示した。(中心に沿って、口 はさみ 胴体 尾 足) そうすることで細かく見ていくことを確認していたので、描けずに躊躇する児童はいなかった。

### (課題)

今回の学習では、初任者研修の示範授業の1つとしての内容だった。「絵を描かせきらない」「どう指導したらいいのかわからない」という悩みをもっている先生方も多い。このことから、短時間で充実感のある授業を作っていく必要がある。

「低学年だから無理」だと考えずに、様々な画材にふれ合わせる必要がある。

## 参考文献

- 「小学校学習指導要領解説 図画工作編」 文部科学省  
図工の本質が分かる授業 「見て描く」 柴田 義松  
図画工作科 指導大辞典  
新学習指導要領を読み解く授業への生かし方 藤沢英昭 監修